（別紙２）

審査の結果の要旨

氏　名　服部　文昭

本論文は、11 世紀末に成立した典礼用福音書抜粋（アプラコス）である『アルハンゲリスク福音書』に焦点を合わせ、言語的特徴の緻密な実証的分析に基づいて、それがロシア語史研究にとって持つ意義を論じたものである。特に、この写本が萌芽期における文章語のみならず、当時の日用語（живая речь）を探るための重要な資料でもあるという着眼点が全体に活かされている。『アルハンゲリスク福音書』にはOCS（古代教会スラヴ語）のカノン・テキストからの逸脱が多く見られるが、著者はこれを日用語の影響による「乱れ」として片付けるのではなく、写し手による意図的な改変・編集の意図のこめられた「異読」と考え、そこにキエフ・ルーシにおける文章語が洗練され、日用語の影響を受けながら古代ロシア文語となっていく過程を読み取る。

本論文は序章と、全六章からなる本論、そして結論から構成される。

まず第一章および第二章は、OCS、日用語、ハイブリッド性、ダイグロシア（二言語変種使い分け）といった基本的概念を整理しながら、当時のキエフ・ルーシの言語状況を描き出す。著者は古代ロシア文語（10～14 世紀に東スラヴ族によって使われた文章語）を、キエフ・ルーシに外部からもたらされたOCSという異質な言語が、現地語、すなわち東スラヴ族の日用語の強い影響を受けて変化した結果形成されたハイブリッドな言語であると規定し、OCS と日用語が混淆した状態を把握するために、ダイグロシアやレジスター（言語使用域）といった概念を援用しながら、当時の言語状況の実体に迫ろうとしている。

続く第三章は、古代ロシア文語の萌芽期を代表する『オストロミール福音書』『アルハンゲリスク福音書』『ムスチスラフ福音書』の三つを取り上げて、それぞれの写本の言語および編集上の特徴を比較しながら考察し、第四章は『アルハンゲリスク福音書』の特徴についてさらに実証的に検討している。

そして第五章と第六章で著者は、ロシア語史上特に大きな変化を遂げた過去時制、とりわけ未完了過去とアオリストに着目し、『アルハンゲリスク福音書』の異読箇所に焦点を合わせて、そこに日用語における時制体系が反映している可能性を指摘した。これは本論文の最大の貢献の一つと評価できる。

以上を総合して、本論文は『アルハンゲリスク福音書』のロシア語史研究上決定的に重要な意義を十分な説得力を持って示しただけでなく、古代ロシア文語の形成の複雑なプロセスを鮮やかに描き出しており、この分野での研究の進展に大きく貢献する国際的水準の独創的な研究成果と認められる。言語の実体を説明するための様々な概念の用い方にやや曖昧な点があることが指摘され、また実証のための具体的な用例を今後さらに豊富にしていくという課題も残されたが、それも本論文の高い学術的価値を損なうものではない。よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。